



門真四中だより

「つながる」「わかる」「切り拓く」

令和5(2023)年1月20日

第62号

編集・発行：校長 上甲 尚

「生きる」ということ



今日は私がかつて担任した生徒のことを書かせてください(A君としますね)。1月16日はA君の命日でした。31年前の平成4(1992)年1月16日、A君は病気で亡くなりました。まだ中学3年生、15歳でした。

3年生でA君を担当しました。温厚な性格で、バスケットボール部に所属し、絵(イラスト)を描くのがとても上手でした。ユーモアのセンスがあり、私の似顔絵もよく描いてくれました(なぜか怒っている表情ばかりでしたが...苦笑)。

そんなA君が5月のGW明け、「先生、ずっと腰が痛くてちょっとはれているんですよ」と言ってきました。「そんなに痛いのなら一度、大きな病院で診てもらったら？」と軽い気持ちで答えました。数日後、関西医大病院(滝井)で精密検査を受けたのですが、なんと即入院になってしまいました。「えっ、そんなに悪かったの？」と驚きを隠せませんでした。結局、A君はそれから一度も退院することはありませんでした。

入院してからは、クラスの生徒やバスケット部の仲間と一緒に何度かお見舞いに行きました。修学旅行のおみやげを渡した時の嬉しそうな笑顔が忘れられません。その頃は早く退院できればいいなぐらいに思っていました。まだ病名も知らなかったので...

しかし、入院は長引きました。7月に入ると東京・板橋区の病院へ、11月にはお母さんの実家の近くの北九州市の病院へと転院してしまいました。「一体、どうなってるんやろ？そんなに重い病気なのかな？」嫌な予感がしましたが、どうしても病名を尋ねることはできませんでした。お母さんの方からも詳しいお話はありませんでした。

東京、北九州の病院に転院してからは、お見舞いに行けないので、毎週授業のノートのコピーや学級通信、クラスメイトの手紙などを病院宛てに送りました。音楽の授業で録音した「クラス合唱」が入ったカセットテープ(時代を感じますね)やクリスマスカード、年賀状も送りました。友達思いの優しい生徒の多いクラスでした。A君からは何度か返事の手紙が送られてきました。そこにはいつも「感謝」の言葉が綴られていました。

A君のお父さんは寿司職人で、お店を2軒経営しておられました。彼の夢は高校を卒業した後、修業を積んで寿司職人になり、お店を継ぐことでした。お父さんもそれを楽しみにしておられました。

A君が亡くなった後、お母さんから聞いた話なのですが、入院中、彼は「早く家に帰りたい」「こんな辛い思いをするのは僕一人で大たくさんや」「お母さん、僕を見捨てんとってな」とよく言っていたそうです。二人きりの病室で、泣きながら抱き合ったことが何度もあったと...。お父さん、お

姉さんも忙しい仕事の合間をぬって何度も東京、北九州の病院に足を運んでおられました。本当に優しい家族でした。

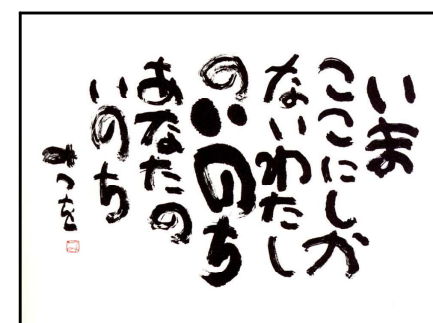
そして忘れもしない1月16日。私は他のクラスで授業をしていたのですが、先輩の先生が「上甲さん、ちょっとええか」と教室まで来られました。廊下に出ると、「今、A君のお父さんから電話があった。亡くなったそうや...」と顔をしかめながら伝えられました。授業を中断して職員室に急ぎ、(北九州の)病院に電話してお父さんにつないでもらい、確認しました(当時はまだ携帯電話はありませんでした)。私はショックで頭が真っ白になり、その後は授業になりませんでした。終礼でクラスの生徒にA君が亡くなったことを伝えました。みな、涙々でした...

その日の夜遅く(23時過ぎ)、A君は自宅に戻ってきました。家に寄らせてもらったのですが、痩せこけた彼の顔を見て言葉が出てこず、涙がとまりませんでした。15年間、大切に育ててこられた、かけがえのない、大切な我が子を失ったご両親の悲しみはどんなに深いものだったのでしょうか。お姉さんの悲しみも...。おばあちゃんが「私よりも先に逝くなんて...。私が代わってあげたかった」と棺にすがりつきながら泣き崩れておられた姿が忘れられません。

お通夜にはクラスの生徒が全員参列してくれました。他のクラスの友だちもたくさん参列してくれました。告別式は平日だったので、クラス代表の生徒や友だち、バスケット部の仲間などが参列してくれました。お通夜でも告別式でもすすり泣きの声はずっとやみませんでした...。2か月後の卒業式には、ご両親が出席してくださいました。A君の座席を用意し、呼名もしました。卒業式の後、教室に戻って最後の学活をしたのですが、ご両親がクラスの生徒たちに涙ながらにお礼の言葉を伝えてくださいました。それを聞いて、また涙々でした。

言うまでもないことですが、命あるものは必ず命尽きる時が来ます。人として生まれてきた以上、絶対に避けられない現実です。人は誰もが家族や愛する人をはじめ、自分にとってかけがえのない大切な人の死という、言葉では言い尽くせない悲しい場面に遭遇します。それは人として、乗り越えなければならない悲しみなのです。私はすでに父も母も亡くしていますが、本当に辛く、悲しかったです。皆さんの中にも大切な人を亡くした人がいるかもしれません。

でもA君はご両親よりも先に旅立ってしまいました。15歳で...。彼の胸中はどんなに心残りだったのでしょうか。ご両親はどんなに辛かったのでしょうか。「寿司職人になってお父さんのお店を継ぎたい」という夢を果たせなかった彼の無念を思うと、胸が締めつけられる思いです。担任しているクラスの生徒が卒業を待たずに亡くなるなんて、想像もしませんでした。こんなに悲しく、辛いことはありません。「人」の寿命は、誰が決めるのでしょうか...。毎年、1月16日が近づくと彼



のことを思い出します。そして「命」ってなんだろう、「生きていくこと」ってどういうことなんだろうと考えるのです。

「命」について、「生きること」について考えるきっかけにもらえればと思い、書かせてもらいました。どうか親御さんから授かったかけがえのない「命」を大切にしてください。精一杯、生きてください。家族や友だち、周りの人を大切にしてください。